

(6) 分娩介助前の手洗いの効果の持続性の検討

—手術用手袋装着直後の細菌数の推移—

川崎医療福祉大学大学院保健看護学専攻修士課程 ○小寺 晶子

川崎医療福祉大学保健看護学科 杉浦 絹子

川崎医療福祉大学大学院健康科学専攻博士課程 氏峰 栞里

【要 旨】

〔目的〕

本研究では、分娩介助前の手洗いの効果を、手術用滅菌手袋装着後の細菌数を観察・分析することにより明らかにすることを目的とした。

〔研究方法〕

被験者は、本研究の研究者および研究協力者である本学助産学コース在学生の計6名であった。実験方法はグローブジュース法とスタンプ法である。いずれも ①手洗い未実施、②WHOのガイドラインに則ったアルコール消毒製剤（ヒビスコールSH、サラヤ株式会社）を使用するラビング法を実施、の2つの方法で実験した。各々、実験開始直後、利き手と逆の手掌・手指の細菌を採取し、その後分娩室と同様の環境下で分娩介助者の装具を装着して90分間過ごし、細菌を採取した。グローブジュース法では一般寒天培地（日水製薬）他計5種類の液体培地、スタンプ法ではパームスタンプチェック一般細菌

（SCDLP）寒天培地（日研生物医学研究所）を用いた。

〔結果及び考察〕

今回、90分後の細菌数の増殖状況は被験者・培地によって相違がみられ、手洗い未実施の場合、発汗の自覚のある被験者の検体は90分後に著明に細菌数が増加していた。これは、被験者の毛穴や皺壁の中の細菌が皮膚表面に出てくるためであるといえる。一方手洗い実施の場合、90分後の細菌数は発汗量にかかわらず僅かであった。ガイドラインに則った手洗い実施によりアルコール製剤を十分に手指表面に塗り込むことで得られた消毒効果を反映していると捉えられる。

以上のことから、手袋装着前のガイドラインに則った手洗い実施が重要であることが再確認された。臨床現場では、急速に進行する分娩時にもガイドラインに則った手洗いを正確に実施するための時間を捻出する必要がある。